

年齢:82歳 性別:女性 疾患名:脳梗塞(左延髄部)

申請中 → 要介護2

リハ病院
入院事例

【介入までの経緯】病前は一人暮らしで、スポーツジムでのプールや友人との社会的交流を大切にしながら生活していた。発症後、1ヶ月の急性期病院での臥床した生活に加え、リハ病院に入院後も、今後の生活を想像できず、生活全般が受身となっていた。

【本人・家族の生活の目標】本人:①車いすなしで身の回りのことができるようになる。②調理・洗濯を自分で行き、一人暮らしに戻る。
家族(娘さん):本人の慣れ親しんだ地域で暮らし続けたい希望を尊重したい。

| | 開始時(入院時) | 中間(2ヶ月後) | 在宅復帰(3ヶ月後) |
|-------------|---|---|--|
| ADL・IADLの状態 | <ul style="list-style-type: none"> ○OADL車いすで介助・見守りで実施。 ○記憶障害が出現し、見当識・構成障害・注意障害が出現 ○IADL機会ほぼなし | <ul style="list-style-type: none"> ○OADL自立(歩行):スケジュール管理困難 ○IADL評価・練習:洗濯・掃除は可能で、調理は材料の準備で良好に遂行可能・自主トレーニングの実施 | <ul style="list-style-type: none"> ○家族:「1人暮らしに戻れてよかった。手を出し過ぎず、これからも見守りたい。」 ○本人:「友人も来てくれ、何とか帰れそうです。」 |
| 生活行為の目標 | <ul style="list-style-type: none"> ○立位・歩行を安定させ、歩行器導入 ○病棟ADLを立位・歩行で実施、不安時は見守り、なるべく自分で実施する ○趣味の再獲得と家事動作導入 | <ul style="list-style-type: none"> ○家事動作全般を安全に実施できる ○住宅訪問を行い、自宅環境での安全面を配慮したADL動作・家事動作の確認 ○退院後のイメージをつくる | <p>【考察】1人暮らしの希望はあったが、立位・歩行の恐怖心のため、主体的生活が困難であった。身体機能の向上により、ADL自立したが、記憶障害は残存し、メモリーノートの導入、また、早期から1人暮らしを想定し、ケアマネ・娘さんとの連携を行い、外出・外泊練習実施。外泊時に近隣の友人が自宅を尋ね、交流が再開、慣れ親しんだ地域での生活を再出発したいとの強い思いにつながり自宅退院した。</p> |
| 介入内容 | <ul style="list-style-type: none"> ○立位バランス・歩行練習 ○出来事帳(メモリーノート)導入・評価 ○ネット手芸など趣味活動を再開 ○娘さんに友人との交流の継続を依頼 | <ul style="list-style-type: none"> ○家事動作練習(訓練室・自宅) ○退院に向け、メモリーノートの定着 ○介護プランなどケアマネ・娘さんも含め生活スケジュール・プラン確認 | |



結果 :3ヶ月で在宅復帰:自宅内での家事活動も遂行できるようになり、訪問介護・近隣の友人・娘さんの支援を受けながらメモリーノートの記載も継続でき、安全に生活可能。友人との交流も再開し、友人と一緒に近隣の散歩や手芸活動やおしゃべりを楽しんで生活されている。

課題 : 居住されている地域課題として、昔なじみの高齢の居住者が少なくなり、若い新規居住の人との交流がほとんどないため、地域交流活動や、地域のサロンなどの場の構築が必要であると考えます。